

《修士論文要旨》

韓国の壁画保存状況の研究

—現在の保存方法と新技術の開発そして日本との比較—

柳 成 煜*

韓国の壁画は、寺院や古墳など、様々な場所で観察することができ、そのための研究もかなり進んでいる。しかし、今までも壁画のオリジナル性を維持した状態での復元と保存のための研究は、総合的に進歩していない。その文化財を担当する機関や研究者によって保存成果性に大きな違いが発生するのが現実である。

この論文では、韓国内の壁画の保存のために顔料の研究、壁体の研究、保存修復のための方法と現況、そして日本国内壁画保存のための対策について総合的に研究した。

壁画研究の必要性として、まず考えてみたことは、壁画をそれ自体の文化財としてみて保存、復元する必要があることについてである。今までの韓国の文化財研究の傾向では、壁画は建築物と一緒に一つの文化財として考えられてきて独立した文化財としての関心の対象になれなかった。壁画はこのように固定されて存在するため、その保存方法も非常に限定されるしかなく、常に外部の災害の危険に露出されている。また、壁画文化財を研究する研究者も韓国内では他の文化財に比べて少ないが、全国的に分布している寺院の壁画はその数が非常に多く、今後の研究と調査が期待される場所である。

本研究で調べた壁画に使用される顔料は、まず古代に使用された顔料と現代の補修のために使用される顔料（主に丹青に使用される顔料）などがある。古代顔料の研究は、過去に数人の研究者によって行われたことが全部だが、2000年代以降もっと活発に進められている。しかし、これもまた何人かの研究者によって進められているだけなので、もっと多くの研究者たちの関心が必要だ。古代顔料の研究に続き、現代顔料の調査も進行したが、現代顔料の場合、現在の韓国では、国立文化財研究所によって指定された顔料を使用するようになっている。

壁体の研究としては、壁の製作技法と構造、使用された材料の特性について調べた。一般的な韓国の壁画の場合は、背景となる壁体は木枠を作り、前後に泥を塗って基本壁体を製作し、その上に再びベース層と塗料層を作った後に塗料層の上に絵を描く構造になっている。

韓国内では壁画補修工事のために建築物からの壁画と壁体を外して補修、補強する作業を20世紀半ばから施行しており、この作業で使用される充填材と接着剤の研究も2000年代以降活発に行われている。伝統的に使用された充填材として泥などの土性物質と接着剤で膠などの天然物質が使用されたが、現代の補修工事では、石灰やモルタルなどの充填材とアクリル系樹脂、酢酸ビニル系樹脂などの合成樹脂が主に使用された。補修に使用されたこれら充填材と接着剤の物性と既存の壁画との違いが原因で損傷が発生することを防ぐために、最近では代替物質を開発しようと

平成24年度 *文学研究科文化財史科学専攻

している。

また、壁画の原型の維持、補修のための材料特性の把握のために考えてみるべきことが古文献との比較研究である。朝鮮時代には建築物を製作する時に製作報告書になる記録を出版しており、この文献には当時使用された材料の種類と産地などの情報が詳しく記載されている。また、模写図も一緒に記録されている場合が多く、補修、復元をするときは、重要な参考資料となるので文献学との共同研究を試みる必要がある。

最後には、日本の壁画文化財とその保存のための努力について調べてみた。日本の代表的な壁画文化財である奈良県法隆寺の火災による一部の損失と現在の保存状況を調べ、さらに日本国内の文化財保護のための消防法について比較してみた。韓国と日本の両方とも放火を含む火災による文化財の損失が多く発生している状況で、日本の強化された消防法とスプリンクラーなどをはじめとする近代化された火災鎮圧施設の韓国導入の必要性を実感するようになった。

壁画文化財の保存のために優先的に必要なのは、これから発生する損害や被害を事前に予防することだが、もし損傷が発生しても、これをどのような方向に補修、復元していくのかは、その時の対象文化財の基礎研究にかかっている。可能な限り早く全国の壁画文化財の状態と構造などの基本的な分析が行われ、保存のためのデータを構築し、一方では、様々な充填材や接着剤などの復元材料などの研究開発も必要だと思う。